

は し が き

国際化の大きなうねりが教育界にも押し寄せています。国際化の進展に伴って、学校における英語教育も一層の充実が叫ばれ、その一環として、英語を母国語とする外国人青年が、本県にも数多く招致されるようになりました。

英語を母国語とする青年たちが、ごく身近にいるという事実は、様々な分野で大きな衝撃を与えつつあります。学校の授業においては、コミュニケーション能力を重視する授業へと質的な変化が生じ、また生徒たちは、教室内の外国人の存在を自然に受け入れるようになってきました。一方、教師にとっては、発音や文化背景などに精通した同僚が、いつも隣りにいるという状況ですし、さらに、地域社会においては、日常生活の中に、異文化で育った新しい隣人が壁1枚隔てただけの隣りにいるという状況になりました。

しかしながら、二つの異なった文化が常時接触しているという状況は新たな問題も生み出しました。その原因の多くは、自分の文化的価値観のみを判断の基準とし、異文化に対して心を開こうとしないという点にあるようです。そうした文化的アプローチは日本人の側にも、外国人の側にも見られます。

本双書では、そうした異なる文化が接触する際に起こった問題を念頭におきつつ、契約や手続きの解説を試んでいます。英語指導助手の制度の導入から4年近く経過した今、英語指導助手との問題解決に直接携わった多くの人々から、貴重な体験談やご意見をいただきました。そうした異文化との接触から生まれた貴重な経験や、その過程で新たに提起された問題点が、この双書の柱となっています。

本双書が、多くの人々に利用され、新しい教育を受けつつある生徒たちのために、国際理解や異文化理解が一層有効に進められますよう、祈ってやみません。

平成3年4月

新潟県立教育センター

所長 海 藤 是 夫